

810.7-Ma81ウ



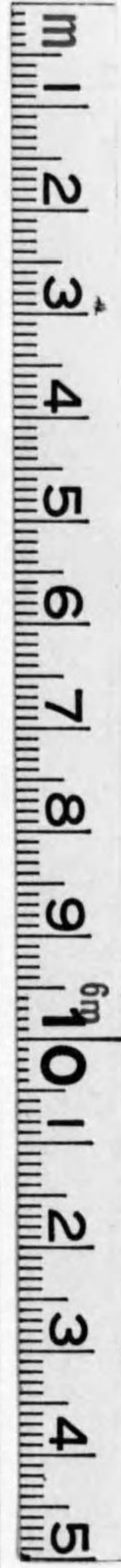
1200500753251

0.7
A81

X
複写

日本語教授の出発点

松宮彌平著



始



933
409

松宮彌平著

日本語教授の出発點

財團法人日語文化協會

日本語教授研究所

810.7
MA81

凡 例

一、本研究所は、日本語の普及に關する各般の問題についての研究の成果、及び各方面の權威ある研究・論說等を隨時發表致します。

一、本研究所での研究の特色は、主として次に掲げた要目につき、専ら實地方面に重點を置き、體驗的意見を發表し、又具體的提案を試みようとする所にあります。

(イ) 日本語普及に關する諸問題

(ロ) 日本語教授法・教材及び教師養成等に關する諸問題

(ハ) 日本語に關する諸般の研究調査

一、本研究所の研究報告は、日本語教育關係者並にこれらの問題に關心を有する諸賢の參考に資し、以て日本語普及の先驅となり、聊かその世界進出に貢獻せんことを念願とするものであります。



財團法人 日語文化協會

日本語教授研究所

日本語教授の出発點

松 宮 彌 平

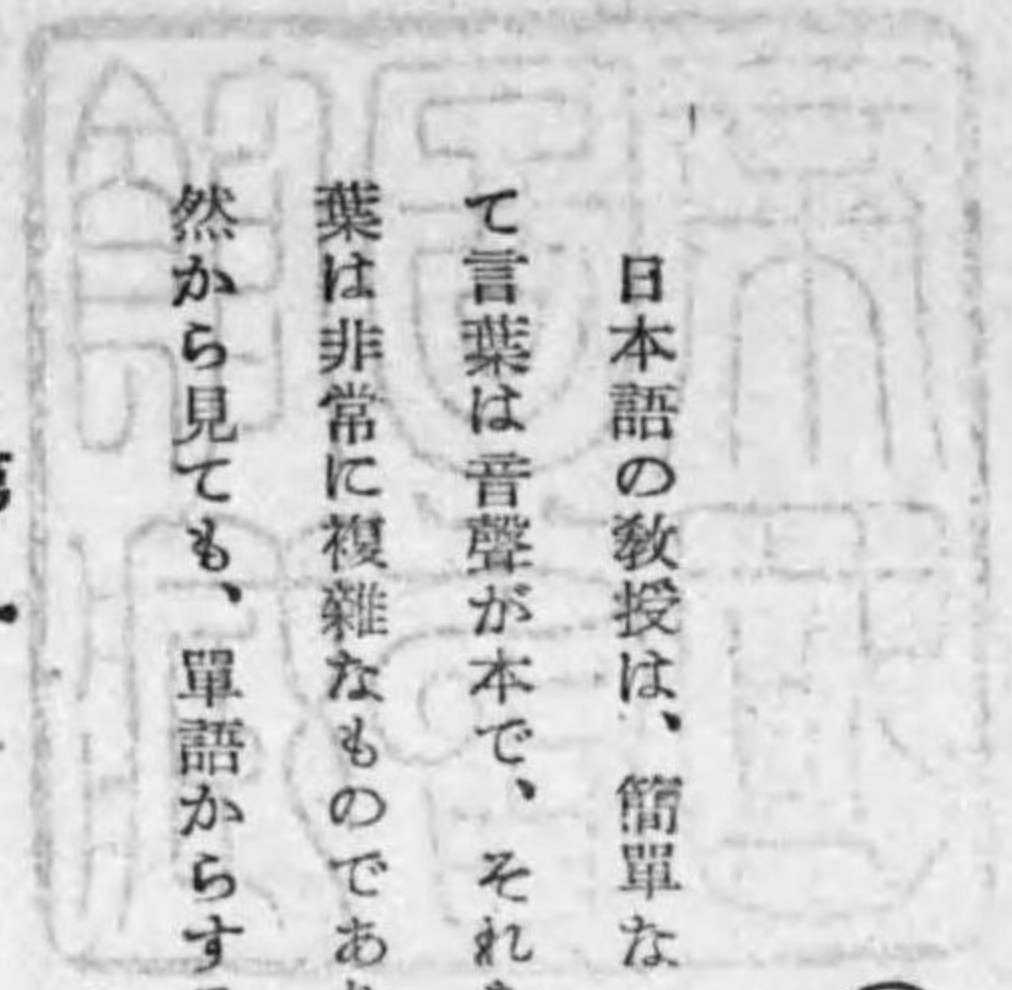
今や、世界に於ける我國の勢力が未曾有の發展をなすと共に、日本語の普及が現實の問題として取上げられ、各方面からの講究論議も盛になつて、一般の關心を惹くやうになつて來たことは、誠に慶ぶべき状態といはなければなりません、さうして、私共の前には、これに對處すべき普及の方策、企劃施設が、實地事項として横たへられてゐます。中でも日本語普及とは唇齒並行の關係にあつて、しかも、その中樞を離れない對外國人日本語の教方、即ち「日本語教授法」の問題について、これをどうするかといふことは、刻下緊要の大きな問題であります。然るにも拘らず、これらの緊要問題が、存外、論議者乃至當事者間の注意する所となつてゐないやうな感があるのは、抑どういふものでありませうか。もとより、この點についても、全く論議を聞かないでもありませんけれども、どうも刻下の現實に對しての主要適切な點とは、相當に懸けはなれてゐる所があるやうに見えます。いよ／＼の實地に施す指針、方法といふことになると、殆ど何の據所も與へられないやうな恨があります。近頃、頓に發刊せられる對外人日本語教授法に關する著作の数々を見ても、依然として、教授の理論や言葉の上の論議に傾倒したものが少なくないやうであります。しかし、現在の情勢では、日本語教授問題は、最早、机の上の理窟で片付けられない問題になつてゐます。宜しく適當な教授の實際方法を握り占めて、さうして日本語進出の活舞臺に飛躍しなければ

らない時であると信じます。

この際に當つて、年來採つて來ました日本語教授の方法は、必しも随一といふ譯のものでもなく、また教授の指針を與へようと考へたものでもありません。また近時頗る喧しい翻譯法がどうの、直接法がどうのと、教授法式についての論議に對して、是れを批判しようといふのでもありません。實は、それらにはあまり關知する所もないのでありますが、唯自分の持つてゐる經驗と信念に基いて、現に外人學習者に對して實行し來つた「日本語で日本語を教授する」方法によつて、教授法中の最も大切な入門期教授の實際を、教授理論とか教授原理とかの論述を出來るだけ省いて、實地に取扱ふ部面のそのままを、ここに記述して見たいと思ふのでございます。もし、ここに記述した通りの順序、方法で取扱へば、自然に日本語教授作業は運ばれて行くのであります。今の時代に、かうした教授書が必要なのではあるまいかと思ふ所から企てたのであります。幸に、これが時代の要求に應じて、日本語教授の不十分な點を補成する一助となり、また、實地に日本語教授事業に立ちさはつてゐる方々の参考に資すると共に、日本語普及の方面に多少の貢獻が出来るならば、本懐の至りに思ふ次第であります。

本書「日本語教授の出發點」は、「入門期教授の實際」として、上・下二卷に分けて發刊する豫定であります。そして上卷には入門期教授の發端である音聲によつて取扱ふ極初の教授について、單語、句の實地取扱を詳しく記述しました、次卷には、文の構成へ（話の組立）及び文字によつての取扱（讀むこと）と、音聲によつての取扱（話すこと）と、これらの作業の並行全一的に施される初歩について述べようと思ひます。日本語教授はそれなくては完璧を期することは出來ない、その筋道を明に致したいのであります。

入門期教授の實際（上） （極初期の教授）



日本語の教授は、簡単な「名稱語」を音聲によつて聽取らせることから始めます。その音聲によるわけは、すべて言葉は音聲が本で、それを聽くことが、言葉運動の始であるからであります。また、名稱語からといふのは、言葉は非常に複雑なものでありますけれども、複雑な文態に進む以前には、また極めて簡単な行動で、その發達の自然から見ても、單語からするのが取扱上の常則であると考へられるからであります。それで、第一の課程は

第一

ハ タ

ハ ナ

であります。さて、これをどう扱ふかといふと、先づ、その第一の

ハ タ

の發音を教へます。入門極初期の初に於ける各名稱語は簡單とはいつても、學習者はその言葉も、その音も、すべ

て新しい未習未知のもので、始めて耳にするのでありますから、正しく、はつきり、しつかりと、發音して聽かせます。音の緩急、高低、強弱、抑揚などを、初から氣にするには及びませんが、教授者自身の日常慣用の調子のままで、ゆつくりと聽かせます。そして、一回、二回、三回……と重ねて聽かせて、數回乃至十數回に及びます。即ち

教授者 「ハタ」、「ハタ」、「ハタ」、「ハタ」、「ハタ」……

のやうに繰り返して發音して聽かせるのであります。その間、學習者は唯教授者の發音を聽いてゐます。この際に、教授者が一回發音して聽かせると、直にそれを學習者に言はせたり、又學習者の方でも、教授者が發音すると、聽取れもせず、甚しきは聽き終りもしない中から、途端に逸早く言ひ出したりすることが、往々見受けられる所でありすけれども、何れも、音の教授、また學習としては感心の出來ない取扱であります。教授者は學習者が確實に聽取るまで繰り返かへして聽かせ、學習者も、また落付いて耳を澄ませて聽取るのであります。人によると、言葉を教へるのは、口に言はせることだと思つてゐるやうでありますけれども、それは言葉を學ぶ作業の上からは半に過ぎません。言ふことの前に必ず聽かせることが徹底しなければ、言葉教授の完全を期することは出來ません。よく聽取れた言葉が、よく言へることになるのであります。聽取れない言葉が完全に口頭に上し得られたといふ例は、まだ聞いたことがありません。

言葉の教授は、「聽取」が第一であります。これが最先最要の作業であります。今、言つたやうに、許される限り、回数を反復して、同じ言葉を聽かせます。これは教授者の任であります。そして學習者も亦靜に注意して教授

者の發音を聽きます。これが學習者の務であります。さうして、學習者が聽取れたと思ふ時に、始めて學習者の口頭の上で言はせします。その言はせることも、僅に一回や二回で、直に正確に言へるやうになると思つてはなりません。幾回となく言はせてゐる中に段々に熟して來るのでありますから、教授者は學習者に言はせるのは、教授といふよりも、寧ろ練習を導く態度が肝要であります。そして學習者に言はせる度に、毎回必ず模範音を聽かせては繰り返かへさせます。その方法は、教授者が模範音を示せば、學習者は猶豫なくその通り模倣して發音するのであります。その方式は、

教授者 「ハタ」……………學習者 「ハタ」

教授者 「ハタ」……………學習者 「ハタ」

教授者 「ハタ」……………學習者 「ハタ」

(數回反復)

のやうに、言つては聽かせ、聽かせては言はせて相互で反復するのであります。この場合に、組教授でも少人數ならば個々に模範音を授けて、個々に口述させます。組の人數が多勢ならば、一同に齊しく模範音を聽かせ、その中の一名を指名して口述させます。同じやうにして數名に及びます。そして、それから組全員に齊唱させます。そしてこの齊唱を幾回か繰り返かへします。その方式を記せば

教授者 「ハタ」數回範誦の後 組全員一同 「ハタ」(二回反復)

教授者 「ハタ」

教授者 甲生を指して「ハタ」——甲生「ハタ」

教授者 乙生を指して「ハタ」——乙生「ハタ」

教授者 丙生を指して「ハタ」——丙生「ハタ」

教授者 丁生を指して「ハタ」——丁生「ハタ」

教授者 戊生を指して「ハタ」——戊生「ハタ」

教授者 「御一所に」といつて、「ハタ」——組全員一同「ハタ」

(二、三回反復)

であります。そしてまた、この方式の練習を一回ならず反復いたします。およそ、これらの教授方式は、機械的で面倒はなく、忠實に親切にすることが第一でありますから、この方式が一通り分れば、教授者は適宜に工夫して、一層適切有效な教授が出来るはずと思ひます。この扱ひについて、必ず教授者の忘れてならない最要件は「ハタ」といふ言葉の發音を完全に導くことで、その一途を餘念なく、たどるのであります。學習者に發音をさせる都度都度に模範音を與へるのは、全くそのためで、模範音を學習者の發音を正確にする定規にするのでありますから、決して油斷、怠慢があつてはなりません。さうして、模範音を與へながらの發音練習は、これを幾回繰り返さうとも、その多きに失する心配はないのでございます。

また、この間、學習者に対する必要條件は範音を聴かせて、それを模倣させるだけで、何等、物を見せることもしなければ、讀ませることも、書かせることも致さないことでもあります。一言でいへば耳と口だけの練習作業のみであります。こんな場合には、學習者は、とかく教授者から聞かされた言葉を記號して讀みたいとか、せめては心覺にしたいといふ所から、帳面や鉛筆などを用意して置いて、このやうな場合に持ち出すものであります。それも許しません。私の教へてゐる東京の日語文化學校では、新學年に新入學生が入つて來ると、暫くの間は皆一つの組にして、「名稱語」を土臺にして、發音練習を致すのであります。その入學第一日には、當校の教授方法を知らない連中は、大抵、紙や帳面、鉛筆のやうな筆記用具は言ふまでもなく、辭書までも持ちこんでまゐるものもありません。各机の上は中々賑ひますが、しかし、教授にかかると、劈頭、それらの用具は一切不要、教室へ持ちこむものは、聴くための耳と、言ふための口だけで十分だと言ひ渡します。生徒達は意外の面持と、不平等さへ交へた、げん顔つきでありますが、とにかく、その翌日からの机の上には、それらの學習用具は一點も認めなくなりません。

かくして、「ハタ」の發音が耳に聴き分けられ、口に言へて、多少とも、日本語の言ひ方に慣れて來た所で理解を與へます。理解といつても、言葉の解説を試みたり、講義めいたことを聴かせたりするものではありません。實物か、繪畫か、又は標本かなどを、前以て用意して置いて、今の「ハタ」を理解させるのならば「旗」を直觀させます。即ち、今、發音を練習して、聴いたり言つたりした「ハタ」といふのは、この「物」のことであると認識させるので

八
あります。この頃の理解はその程度に止める。それで十分であります。しかし、このやうにして與へられた直観理解は、如何にも簡單で不徹底のやうに思ふものもありませうが、決してさうではありません。實に解説や講義をくだくだしく聞かされるよりは、却つて明瞭な理解を得ることは、實際に施して見た教授者の誰も經驗する所であらうと思ひます。

直観による理解を與へるまでの「ハタ」は發音だけの繰りかへしで、「物」については認識を缺いた機械的また反射的の反復練習で、まだ言葉學習の完全に達しないのでありましたが、今、「旗」を直観して理解が明確になると共に、音聲の言葉は事物の認識と融合した全一の作用になつて、學習者の言語習得感を大に満足させます。私は新入學生の最初の第一時に於て、「ハタ」を教へますが、その發音を教授し且反復してから、改めて生徒一同で「ハタ」と齊しく高唱させて、直下に實物の日の丸の國旗を見せると、學習者は一齊に手を叩いて歡びます。さうして、「ハタ」といふ日本語は、日本語學習の初日に、大日本帝國の標識である國旗と融和結合した一つの意識になつて、彼等の中に完全な形で成就するのであります。同時に、學習者は日本語の最初の第一語の習得からして、日本情緒、日本氣風及び精神の或點を微かながらにも體得する第一印象に觸れるのであります。

この理解作業に引きつづいて、また教授者は一回一回に模範音を示し、それに連れて「ハタ」を反復練習いたさせます。この時には、前には機械的に過ぎなかつた無意識的發音練習は、今度は「ハタ」の意義と合致した完全な日本語の「ハタ」を反復練習することになります。言葉學習の過程から見れば、無意義に發程した「ハタ」は、ここに有意義への進歩を踏みしめた譯であります。これで最初の課程の「名稱語」の一つを習得したのであります。以上の作業を終つて、次に選ばれた第二の名稱語。

ハナ

を教へます。それも「ハタ」と同じ方式で、教授者は、先づ發音を繰りかへして耳に聽かせ、學習者が聽取つた所で「ハナ」と言はせませす。それを、また模範音を與へながら反復して、發音に慣れた所で、實物、繪畫或は標本によつて「花」を直観させて理解を得させませす。しかし「ハナ」は一種の或花を指したものでなく、多種多様の花を總括していふのでありますから、それを了解させる要があります。さうですから、一種だけでなく數種の花を一所に見せるやうに致します。繪畫などで色々の花が描いてあるのを使へば便利でございます。この直観させる花の種類は何でも差支ないのでありますけれども、その中に櫻の花を加へたいものであります。櫻の花は我國の花の中で一番名の知られた花で、外人間にも非常に賞美せられてゐますから、花の中でも櫻の花といへば、一種の憧れを感じてゐるものが少なくありません。従つて、日本的意識を誘ふ力が十分にあります。これは言葉を習得させる上にも、有効に扱はるべき所以があると思はれます。或日本語教育家がありました。二三年前の話であります。中華民國へ行つた時に、しかも少年少女の學校へ行きまして、彼等のために、日本國體の話をして、大に日本への認識を喚起しようと試みました。所が、その生徒達は日本語がまだ極めて初歩なので、さつぱり分らない上に、堅苦し

い話で、終に學生達は半ば假睡に落ちてしまいました。教育家先生は中華學生は日本に關心を持たないといつて非常に憤慨せられたといふことを聞きましたが、それは學生達の無關心の罪だとは一概に斷することは出来ずまいと思ひます。それよりも全面満目の櫻花爛熳たる彩色畫でも見せて、日本の花を解説して、花の美に親ませることを先にして、追々に日本の精華に導いた方が、行きなり、日本國體の講話よりも、却つて手近な日華親善の緒が掘めたかも知れません。實に「花」といふ言葉によつて「花」といふ物に親しみ「花」といふ言葉によつてその心をさとする。さうして、「花」といふ言葉と物との全一意識を成立させて、東方の國の「花」に憧がれを持たせる。その言葉の働の妙理はまた床しいものがあります。

「ハナ」の理解に至るまでの教授作業は、個人でも、少數の組でも、多人數でも、前の「ハタ」の取扱と同じであります。さうして、理解を與へてからの練習作業も亦同一の取扱を致します。そして、この時には「ハタ」と「ハナ」の二つの言葉を習得したのでありますから、その二つの言葉を順々に、または逆順に聽かせ、また言はせて、交互に數回から十數回反復して練習を致します。それも都度都度模範音を聽かせながら練習するのは、これまた前に致した通りに致します。その方式は、

教授者「ハタ」——學習者「ハタ」 教授者「ハナ」——學習者「ハナ」
 教授者「ハタ」——學習者「ハタ」 教授者「ハナ」——學習者「ハナ」
 教授者「ハタ」——學習者「ハナ」 教授者「ハタ」——學習者「ハナ」

教授者「ハナ」——學習者「ハナ」 教授者「ハタ」——學習者「ハタ」
 教授者「ハナ」——學習者「ハナ」 教授者「ハナ」——學習者「ハナ」
 のやうに行ひます。これはこの方式さへ分れば、教授者が適宜に、有效に、面倒なく取扱へるものであります。この練習は發音の練熟を期するのみでなく、異つた音の言葉、即ち事物の名稱を聽き分けて、その運用を自由にする端緒であります。これで第一の課程を終ります。

そして、次の課程になるのでありますが、今、第二の課程に入る前に第一の課程の復習を致します。その方式は第一課程の教授の終に致しました練習と同じ方式で復習的練習を致します。それを幾回も反復してから、新しい課程に進みます。この復習的練習は毎新課程に就く前に、相當時間を必ず費すやうに致すのであります。

第二の課程は

第二

ヤ マ
 ミ チ
 ハ シ

であります。これを教授するには、前の課程の「ハタ」「ハナ」と同じ順序、方法で、發音聴取、口述、理解、練習を一語一語丹念に扱つて行きます。さうして、「ヤマ」「ミチ」「ハシ」と、この三つの言葉の教授を一顧終つた時に、かういふ風の復習的練習を致します。

教授者「ヤマ」——學習者「ヤマ」

教授者「ミチ」——學習者「ミチ」

教授者「ハシ」——學習者「ハシ」

と、一應、課程通りの順で練習して、以下次のやうに順を違へて練習致します。

教授者「ミチ」——學習者「ミチ」

教授者「ヤマ」——學習者「ヤマ」

教授者「ハシ」——學習者「ハシ」

教授者「ハシ」——學習者「ハシ」

教授者「ミチ」——學習者「ミチ」

教授者「ヤマ」——學習者「ヤマ」

のやうに、また、この式で「ヤマ」「ハシ」「ミチ」の順序にしたり「ミチ」「ハシ」「ヤマ」の順序にしたり、或は色々に提出順を變へて扱ふのであります。それから、更に最初の課程に戻つて、第一課程の「ハタ」「ハナ」を加へ

て、順々に、逆順に、また色々と順序を變へたりして練習します。この場合に一語毎に模範音を示しては言はせることは前に致した通りであります。この時には練習する言葉は既習語五箇になつておますが、この五つの既習語を練習することは、既習の言葉の復習でもあり、音の練成と共に、常に習得した言葉の想起を促し、言葉活動作用を敏活にする習性を作ることもなるのであります。この練習は、勿論幾回となく、反復すればする程、効果的であります。

ここに「ヤマ」といふ言葉があります。これはいふまでもなく「山」で、富士山を象徴するものであります。外國にも幾多の靈山秀峰はありませうが、我國の富士は日本の表徴として、世界に知れ渡つてゐます。そして、太平洋を渡つて來朝する外國人は、洋上遙に東海の天を望んで、最初に現實の日本意識に浸るのは、彼の白雪に輝く富士の頂を始めて實見した時であると申します、これを眺めつつ日本に對する憧憬に浸りつつ、漸く安着したといふ満足の氣持に溢れて、新に接する國土に對する親みの感に打たれるのであります。その心持は、この「ヤマ」といふ日本語を學習する際に、深い感慨を以て耳にするものがあると見えて、學習者中には「ヤマ」と聞いて、直に「フジャマ」と叫ぶものもあります。若し、この際に秀麗雄大な富士の日本畫幅などを見せれば、殆ど無意識境に入つて見惚れるが常であります。さうして、前課の「ハタ」「ハナ」と關聯的に日本語の最初の教程は相當に日本感興を漲らせて發足することになります。私共は日本語を教授するのであります。けれども言葉を鸚鵡式に傳へるだけでは意味をなしません。その裏に含蓄する風物情緒の間に存在するものを介して、共に深い印象を與へることは、亦

わが使命の重大點であります。

この課程の「ヤマ」「ミチ」「ハシ」は、實のことをいへば、出會した事實からの教材であります。といふのは、いつぞや、輕井澤に滞在中に野外の散策に出掛けた時に、向ふに聳えてゐるものは、聳然たる淺間山で、その山頂まで一條の登山徑路が夕日に輝いて鮮に見えてゐます。そして、こちらには村道に沿うた川があつて、その川に架けた橋の欄干によりかかりながら、その光景を眺めたままが、ここに織り込まれる教材になつたのであります。或人はこの教材について、「ヤマ」といへば次には「カハ」ではないか、それから「ハシ」とするのが常識で、學者の學習意識にも適するもので、配合もよく調ふ譯ではないかといはれた。けれども、これは見た通りの事實をそのまま採つたので、何の工夫も技巧も加へてゐない、そこに自然の味が忍ばれます。教材には、かうした出所が頗る意味のあることではないでせうか。さうして、その見たままの状態を言葉にして教へるのであります。あまり技巧に苦心したり、理詰にした教材よりも、寧ろ興味的で和やかな感情に浸るものがあるといへないこともないと思ひます。

練習する發音のことを一言して置きます。この第一、第二の課程に出た言葉は五十音表によれば「ハタ」「ハナ」「ヤマ」は「ア」列の音で、「ミチ」は「イ」列、「ハシ」は「ア」列と「イ」列の音の連続であります。一體、日本語の發音は彼此發音の難易は考慮しなければなりません。四、五の音を除いては、概してさほど困難なものとは思はれません。それで、最初に比較的手數のかからない「ア」列の音から言ひなれさせます。

「ア」といふのは母音であります。これは舌の自然のまままで下方に下げて、口唇と顎とを廣く開けて發音するのでありますから簡易であります。「ア」列音は皆この型の發音であります。發音練習の初めに先づこの音を音訓練の緒にして、以下「イ」列音その他に及ぶやうに致します。それから個々の單音については、もとより正確でなくてはならないのでありますけれども、音韻や抑揚の問題など、一々擧げ列ねて、學問的に事詳かに詮じ立てるのは決して發音練成の役に立たないといはないけれども、それ程に致さなければ發音は成熟しないといふものではありません。さういふことは音聲學の區域に任せて、こちらの大切なことは、言葉として正しい語調の調ふことを主にして、その間に音の誤あれば、單音で正し、更に言葉として練習するやうに致します。日本語教授の領域はそれであらうと思ひます。日本語教授者は言葉の教授者で音聲學者ではありません。要するに、言葉を本位にして、發音を正しくすることが教授の要領で、言葉を正しく聴取らせば、それで正しく言へるやうにもなる、その言葉活動機構の妙理を活用すべきであります。單音を正しくすれば、それで言葉を正しくするものと考へるのは間違とはいへませんが、しかし個々の單音が正しくても、必しも言葉の調子が調ふとはいへません、むしろ言葉の調子が整ふと、は不確な發音や言方は存在しなくなるやうにも經驗致して居ります。

それから、今度は身邊に近い物の名稱を教へる方に入ります。その課程は

第三

カミ

フデ

エンピツ

であります。この教授も、その方法や順序など、すべて前に採つて来た所と同じに扱ふのでありますから、詳記致しません。前にいつた既習語全部の復習的練習を致してから新課程に進むこと、及び練習する一一の言葉に必ず模範音を示して言はせることを忘れてはなりません。

發音は發音で導く。正しく聽かせる外はないことは疑ふ餘地はありませんけれども、また多少の技巧を加へて見ること無用ではないと思ひます。この課程に出た「エンピツ」は發音がさうむづかしい譯ではありませんが、「エン」の「ン」といふ音が脱落しやすいのでありまして、どうも「エビツ」といふやうに聞えます。この「ン」が抜けるのは、外國人共通といつてもよい程で、例へば「シンブン（新聞）」を「シブ」、「ケンブツ（見物）」を「ケブツ」、トンデ（飛）を「トデ」、「カンガ（考）」を「カガ」のやうな風になるのであります。元來が、この「ン」は弱い音で母音的であります。扱の上でも、獨立した一つの單音とするには疑があります。學習者の方では別に脱落するつもりもなく脱落するのでありますが、「ン」の抜けた日本語で話すのは、言葉の間の音が抜けるばかりでなく、話すその話も、また誠に間の抜けたものになります。然るに、日本語の中には「ン」と組合はさつた言葉は實に多うと

ございますから、正しく言へるやうに導くことは忽にする事の出来ない理由があります。それについては、「ン」を上との音と一所に發音させることとあります。「ン」が抜けて、はつきりしないからといつて、「ン」といふ音を單音で練習するのでは殆ど役に立ちません。例へば、「トンデ」を「トデ」といふのならば、全く「トンデ」の言葉の意味を考へさせずに、發音にだけ専念させるやうにして、「ト」と「ン」を一つにして「トン」と發音させます。そして、幾回も反復させます。正しく「トン」と言へるやうになつた所で「デ」を添へて「トンデ」と言はせるやうに致すのであります。さうすると大概は正しく發音するやうになります。正しく言へない音を、そのまま反復させるやうな練習は、つまり不正な發音を練習させるもので、到底、正しい音になることはありません。それに氣がつかないで間違つた音を直さうとして、その間違つた音を繰り返かへさせておる教授者は少なくありません。多少の技巧を加へても見るべきであります。

「ン」を單音で練習する必要がないと思はれる點は、「ン」は「ン」で發音練習することは普通では不可能に近く、單音では、「ウン」と發音されてゐるやうな次第で、「ン」は「ウン」だとして置くと、事によると「トンデ」と言ふ時に「トウンデ」といふ類の誤を生じないとは考へられません。現にさうした誤を起した例も一二ないでもありません。それが「ン」は母音的でありますから「ト」と連結すれば完全に「トン」と發音することが出来ます。

この課程の教材は、身邊に近い物の名稱語として、教室に於て常に學習者に直視させるに便利なものを選んだのであります。「紙」と「鉛筆」は、學習者には別段目新しくは感ずるものでありませんが、「筆」になると、歐米人

の學習者などは、未だ會て見たことのない連中が多いので、中々物珍らしさうに、書く眞似をして見たり、ひねくり廻したりして、頗る興を感じるのであります。これも彼等が日本を意識する一つとなるものと思ひます。

この第三の課程の練習を終つた時に、第二の課程を終つた時に第一課程の「ハタ」「ハナ」から既習の言葉の復習をかねて反復練習したやうに、又第一の課程から繰りかへして、今では既に八つの名稱語を學んだのでありますが、それをすつと順々に、逆順に、又順序を色々に變へたりして、模範音を一一に示しながら、復習的練習を反復致します。その方式は、

教授者「カミ」——學習者「カミ」

教授者「フデ」——學習者「フデ」

教授者「エンビツ」——學習者「エツビツ」

教授者「ハタ」——學習者「ハタ」

教授者「ハナ」——學習者「ハナ」

教授者「ヤマ」——學習者「ヤマ」

教授者「ミチ」——學習者「ミチ」

教授者「ハシ」——學習者「ハシ」

教授者「カミ」——學習者「カミ」

教授者「フデ」——學習者「フデ」

教授者「エンビツ」——學習者「エンビツ」

教授者「ハナ」——學習者「ハナ」

教授者「ハシ」——學習者「ハシ」

教授者「ミチ」——學習者「ミチ」

教授者「ヤマ」——學習者「ヤマ」

教授者「ハタ」——學習者「ハタ」

のやうに致します。この方式に鑑みて幾度も適宜に適當の斟酌をして復習的練習を運びます。その扱方は教授者の工夫に待つことが出来ると思ひます。この新課程の前後に行ふ総合的復習をかねた反復練習作業は、學習上頗る重要な部分に屬し、音に發音に限らず、言葉活動一般の訓練成熟の樞軸をなすものでありますから、無意義な工作のやうに輕視する人もあるかも知れませんが、決して疎にしてはなりません。正常な口頭の習慣も流暢な叙述運用も圓熟した言葉組織の成立も皆これによつて生れるのであります。日語文化學校の教室では、教授時限は毎回五十分と見てゐますが、その約半分の時間は、この復習及び練習のために費してをります。この練習のためには、教授者も學習者も喉を潤してしまふ程のことも屢であります。

それから、次の課程に進みますが、やはり教室で身邊にある物の名稱を教材に致します。

イス

ツクエ

ホン

チャウメン

新課程の教授に就く前に、先づ第一課程から三課程まで、既習の課程を初からの言葉を順々に、或は順序を變へて、言葉毎に模範音を與へながら、數回の復習的練習を致します。それを終つてから、この新課程に入ります。その教授は前から採つて來た方法と變りはありませんから、改めて申すには及ばないと思ひます。

この課程の中に「チャウメン」といふのがあります。とかく、この書きあらはした假名文字に拘泥して「チャウ」は「チ」「ヤ」「ウ」ですなどといつて、發音の仕方を教へる人がありますが、もとより「チャ」は拗音で、音の成立などを解説してゐれば、中々いふこともありませうけれども、現在の學習程度の扱では、そんなことは一切要しません。殊にまだ文字とは何の交渉も持たないのでありますから、單に「チヨ」と發音通りで聽かせて、その通り發音することを練習すればよろしいのであります。假名で書けば「チャウメン」の五文字であるけれども、言ふ時は「チヨ」で、これは「チヨ」を一音に扱つて、その音を長く引く、それを一音にして、つまり、二音節にするのであ

りますから、假名で書いた文字の數などには拘らないで、言ふがままの發音を、正しく聽取らせることが肝要であります。それから、この長く引く音は、一般に外人には落してしまつて「チヨメン」のやうになる風が、どの場合にもありがちでありますから、教授者が模範音を示すにも、學習者に發音を促すにも、十分注意しなければなりません。

それから、また、ここに出た「ホン」、「チャウメン」の「ン」であります。いづれも、前の課程にあつた「エン」「ビツ」の「エン」の「ン」と同じやうに、上の音と連続してはつきりと言はせませう。前にいつたやうに「ン」は單音では練習が出來難く、言葉の間にあつて脱落しやすい音でありますから、はつきり發音するやうに注意しなければなりません。またここに出た「ツクエ」の「ツ」はむづかしい音とせられてゐます。成程、國によつては、言ひにくい人が多いやうであります。しかし、出來ない音といふことは出來ません。かういふ音は、或學習者には、その似寄の音さへも聽いたことも言つたこともないので、さつぱり發音のたよりがありません。二回三回聽いたので、正しい發音を印象するに至りませう。かういふのは、言はせるに先だつて、普通よりも一層聽かせる回數を多くするのであります。一體、この程度の學習者に對して發音を一回で聽取らせて、直に繰りかへして言はせようとするやうな、しかも完全な發音を求めようとする遣方はいづれの場合にも差控へるはずであります。この音に限りませんが、いづれの音にしても、一概に聽かせて一概に正しく言はせようとおせつて、速急に強制的な扱を致すことは發音を育成する所以でなくて、却つて發音を破壊するものであります。始に思ふやうでなかつたならば、また次の機會を更にまた、他の機會に言はせることに留意し、直下に成功を強ひないで、寛かな態度で氣長く扱はなく

てはなりません。この「ツ」の如きも、それに属するものであります。或はその機会を造つても、機会のある毎に模範音を示して油断なく指導すれば、必ず成功するものであります。

一つ一つの言葉の練習を終つて理解を興へ、更に模範音を示しつつ反復練習をつとめることは、これまでに言つた所と同様であります。その方法は、ここに別に述べなくもよろしからうと思ひます。

それから、次の課程に進みます。今度は

第五

モモ

クリ

カキ

リンゴ

これは果物の名稱語を教へるのであります。資料は食堂の卓子の上の果物鉢に盛つてあつた品々から取りました。教授の材料にする色々の物の名稱は、もとより發音の難易等も考慮しなければなりません。けれども、とにかく、第一に各自の身邊に近いもの、實際に出會した事實などから、出来るだけ實際生活と離れないものを取るの

ありますがこの課程も、その一つであります。學習者もまた、さういふやうに學んで行くことは、實際用語として有効且便利ばかりでなく、學習上に興味を惹くものであります。

この課程の教授も前々の方法と同一に致しますが、この教材を扱つた時の實際談があります。入門初期の學習者一同と、晝の時間に同じ卓子を圍んで午餐を致しました。その卓子には、林檎と柿が果物鉢に盛つて出してありました。學習者は誰もまだその名稱を知つたものではありませんでした、早速、これは後の時間の教材になると思つて、その時に、殊更に、その名稱を一つも教へませんでした。そして、食事後、その残つてゐた果物を一つづつ取つて、かくしに入れて教室へまわりました。そして「モモ」「クリ」「カキ」「リンゴ」と例の通りに發音を教へて、練習もゆつくりと致しました。それから、「モモ」といはせて、折悪しく、桃の實物も標本もありませんでしたから、罐詰の商標紙の桃の繪を見せました。そして次に「クリ」と言はせて、これは瀬戸で出来てゐた標本の栗を見せました。その次に「カキ」を一巡言はせて、學習者各に標本籠の中から「柿」と思ふものを取り出して、自分の席の前に置かせました。林檎を取つたもの、梨を取つたもの、松茸を取つたもの、區々でありました。もとより、柿を柿と知らずに取つたものもありました。そして、各に「カキ」と言はせて更に一同で「カキ」と齊唱させてから、徐に、かくしにある「柿」を出して、「カキ」と發音して示しました。梨を取つたもの、林檎を取つたもの、殊に松茸を選んだ一人は、止め度のないほど笑ひ崩れたのであります。學習者は大人の子供で、食べる物などの教材には一種の興味と快感をもつもので、時折、このやうな方法を試みると、随分面白く教授が出来るものであります。千

遍一律、聲を痼しての暗記的暗誦式の練習に倦怠させるよりも、尙效果的であります。

さて、今の「カキ」であります。その發音は面倒も何もないのですが、その抑揚は正しくないと、「柿」にならずに「牡蠣」になつてしまひます。日本語の抑揚問題は、今俄に決定することは出来ないでせうし、また、さうやかましくもないへない事情もあるやうに思ひますが、しかし、抑揚はそれだから、どうでもよいのだとは考へてはならないことでもあります。今のところ、まだ決定點を見てをりませんが、聽ては決定せらるべきものでありませう。といつても、今差向き大事なのは「柿」が「牡蠣」に聞き誤られないだけのことには致さなければなりません。これは勿論學習者に與へる模範として、第一に教授者の正しい發音と調子が要望せられる所以であります。

それから、終の模範音を與へながらの復習的練習も、一回ならず丁寧に繰り返りかへされることは、これまでと同様の扱をして、この課程を終ります。

次の課程は

第六

サラ

ハチ

サジ

チャワン

であります。この課程は日常使用する食器の類で、朝に晩に最も親しみある器具の幾つかであります。ここに選出したのは、これらを使用する實際の場合から、教授材料にして扱ふやうに致したのであります。教授の方法はこれまでと何等の異なる所ありませんから、ここに述べることは省略致します。さうして、直觀理解を與へること、與へてからの総合反復練習作業も、第一課程から、ずつと繰り返りかへして致します。

發音については、「ハチ」の「チ」が「ジ」に「サジ」の「ジ」が「シ」になることがあります。また「チャワン」は「チャ」が拗音で一音節に扱ふこと、「ワン」は「ワ」と「ン」で、「ン」を脱落しないやうに二音節に扱ふこと、それで「チャワン」は三音節扱ひになります。

次は、

第七

イモ

ネギ

ナス
ウリ

であります。發音では「イモ」はやさしいですが「ネギ」が「ニキ」になつて困つたことを思ひ出します。「ネ」、「ニ」、「エ」列音と「イ」列音で口形の似よつて發音する所から正しく行かないのであります。「エ」列音から「エ」列音になるのも同じ理由であります。「ギ」が「キ」になるのは濁音と清音との聞き分けに、何れも注意を要することでありませぬ。またこれらも實生活關係の野菜の名稱で、常に食卓に上るものであります。資料は内地ならば得難いものでありませんから、理解を與へるには、實物を直觀させることが最善の方法であります。繪畫などでは手数は掛りませんが、事によると、飛んでもない認識違ひをさせることがあります。「芋」といつても「馬鈴薯」もあれば「甘藷」、「里芋」もあり、「葱」にも「日本葱」と「球葱」があります。「茄子」にも日本の茄子の繪では、合點の行かない顔をするものが多いと云います。また「瓜」にしても、同じやうな傾きがあります。實物を直觀させれば、その物を知つてゐると知つてゐないと拘らず、何の面倒もなく即座に理解致します。

理解を與へてからの反復練習も復習的の練習を第一課程の「ハタ」「ハナ」からすることも前々からの例の通りに致します。

それから、今度の課程は

第八

ヒバチ

ヒバシ

ドビン

ヤクワン

であります。教授を進めることは同じ方法で致します。發音では「ヒバチ」の「チ」と「ヒバシ」の「シ」は混同しやすい音でありますから、その發音の別を、はつきりと聞き分けさせること、また「ドビン」の「ビン」の「ン」及び「ヤクワン」の「クワン」の「ン」は、いづれもとかく落ちやすいことは前にいつた通りであります。また、「ドビン」の濁音が「トビン」になる恐もあります。いづれも注意練習しなければなりません。また「クワン」の「クワ」は拗音で一音扱にするのでありますが、この「クワ」は、現在は「カ」との區別が殆ど出來難いものになつてゐます。いつそ、「カ」にしてしまふ考の人が大分あるやうであります。しかし、さう簡單に處置することも出來ない事情もあるやうに思はれます。但し、「クワ」は、人のいふほど、發音上では實際取扱つて見ると厄介に難む程のものではありません。理解は十分發音を練習してから、實物直觀によつて與へます。「ドビン」と「ヤクワン」

は實物を列べて見せるに限ります。或學習者の如きは、繪畫で見せたのに、一切區別がつきませんでした。それはそのはずです。土瓶は焼物で、薬罐は金物ですが、その質の違いを繪に現はすのは容易でなく、形を繪で見せるだけでは鑑別のつかないのも無理はありません。玩具で見せても、なほ腑に落ちません。終に茶の間から實物を持出して來て實見させたことがありました。

直觀理解の後の練習も、総合的復習練習も丁寧にすることは、最早申上げるまでもありません。

それから、次の課程

第九

カ サ

カバン

パウシ

テブロク

これは日常身の廻りで使用するものを擧げて、その名稱語を教授するのであります。やはり前課程を練習して、なほ第一課程の初から既習の言葉をも全部の復習的練習をしてから、この新課程に進みます。教授及び練習の方法

も、別に變りなく致します。

發音が「カサ」の「カ」が「キヤ」に「サ」が「シャ」に、それで、「カサ」が「キヤシャ」のやうに聞えたり、また「カサン」と語尾に「ン」を響かせるものもあつたと思ひます。また「カバン」の「ン」が落ちたり、「テブクロ」の「ロ」が「ル」に響いたり致します。それから、「パウシ」は「ポーシ」で三音節で、「ボシ」ではないことに気付くやうに、はつきり「ポー」と二音節に言はせませす。そして、理解は、いづれも直觀させて、それから引續いての復習的練習、第一課程よりの総合的復習的練習を反復することは、いつもの通りに致します。

次は第十の課程であります。それは、

第十

ト

シヤウジ

ヘ ヤ

マ ド

イリグチ

で、住居に關係ある名稱語であります。この教授に於ては「ト」といふ一音の名稱語が出ましたが、この名稱語の一音なのは、とかくその音を引く風になるもので、この「ト」ならば「トー」となるのであります。「ト」は「戸」で引く音ではないのであります。「戸」ばかりではありません。例へば「メ(目)」、「テ(手)」、「キ(木)」、「ハ(葉)」などでも「メー」、「テー」、「キー」、「ハー」となります。一音の名稱語は、その他いくらもありませんが、油断するとそれが癖になつてしまいます。最初に直さないと、この癖が痼疾的になつては中々矯正することが困難で、生涯の病みつきになるばかりでなく、文字を読むにも、談話をするにも、常にその癖が覗いて誠に聞き苦しいものであります。最初の發音練習からその癖のつかないやうに、正しい發音を導くことは最要條件であります。見る所によると、この誤は極めて微細なことでも思つてか、または全く気がつかないためか、徒にこれを見逃して、平氣で次ぎ次ぎへと發音練習を反復してゐる教授者の少なくないのは驚きます。この點について教授者の注意を促したいものと思ひます。それから「マド」の「ド」であります。その「ド」が濁らないで發音するものがあります。即ち「マト」といふのであります。前にもその例は擧げて置きましたが、この濁る音が濁らないで發音すること、一様ではありませんが、國々の言葉の音に附隨する癖とでもいふのでせうか、國を異にする人々によつて異りますけれども、非常に目立つ程の場合があります。これまでに出了た言葉でいへば、「エンピツ」の「ピ」、「カバン」の「バ」、「バウシ」の「バ(ウ)」などは、さうでもありませんが、「フデ」の「デ」、「リンゴ」の「ゴ」、「ネギ」の「ギ」などは、濁らないで發音する傾向があります。また、これについては、それとは反對に、清音を濁るものもありましてこれらの矯

正には、さう輕々に扱つてはならないやうであります。時には生理的關係のためもあるではあるまいかと思ふやうな場合さへあります。しかし、それを矯正するには、やはり、教授者の正しい模範音を聴かせることが第一で、しかも幾回も幾回も繰り返してよく落付いて靜に聴かせる、聴取させた上で、一回發音させて見る。また數回繰り返して模範音を聴かせて、發音させる、この式で幾回となく、聴かせては言はせませす。この場合に言はせることは勿論必要とするのでありますが、その正しき音の耳の刺戟が、より以上に大切なものやうであります。且このやうな困難は、音感の遲鈍な人に著しく多いのであります。また發音矯正は、一回や二回で、成功させようとおせつても不可能で、成功を漸次に期する餘裕がなくてはならないとは既に申述べたことですが、この清濁を正しくする發音練習は特にその點を考慮して適當に應用指導すべきものであります。

その他、理解に於ては、「シャウジ(障子)」が分りません。日本に來たものならば、實際に見ますから無難といへますが、障子のない地方などでは家屋内部の建附の繪を使ふのでせうが、時には先づ戸が教へてありますから、その戸に關聯して紙を張りつけた戸であると説明して分らせたやうなこともありました。日本の家屋や室内の模寫模型を見て喜んだものもありました、それから、「戸」と「入口」が混同しやすいし、「部屋」と「家」も、さうであります。これらの理解を與へるためには、それぞれの準備を要します。

理解後の復習練習や、第一課程からの復習的練習は、これまで通りに致すのでありますから、別にここに改めていふ要はないと思ひます。

次に、今度は

第十一

ハコ
フタ
ハコノフタ
トケイ
ヒモ
トケイノヒモ

この課程から句の教授に進みます。これまで、単語によつて聞き慣れ、言ひ慣れさせることを主眼として發音練習と共に日本語音にも呢ませるやうに導いてまわりましたが、今度の課程から名稱語と名稱語を助詞で繋いで、一つの意味を表現する句の形態を教へて、これを練習するのであります。その取扱方法は、先づ一應「ハコ」を練習し、次に「フタ」を練習します。それは、これまでの名稱語の扱と同じであります。兩語共に言へるやうになつた所

で、理解を與へ、それから、「ハコ」と「フタ」の間に「ノ」を挟んで、「ハコノフタ」として、幾回か言ひ聞かせ、聴取つたと思つた所で言はせます。そこも、やはり名稱語の扱と同じであります。そして、教授者と學習者との間の模範音を與へて模倣させる練習も、やはり同じに致します。また幾回か反復致します。それから、次の「トケイ」と「ヒモ」を各別に練習して、そして、「トケイノヒモ」を練習致します。それも、すべて扱方に變りはありません。それから、なほ「ハコノフタ」、「トケイノヒモ」を幾回か模範音を示しながら反復して言はせ、さうして、應用練習に移つて、

「どびんのふた」といふ句を聴かせ、そして言はせます。引續いて
「やくわんのふた」を聴かせて、言はせ、また續いて
「ちやわんのふた」も聴かせて、言はせます。またそれらを數回反復します。今度は、元にかへつて、
「とけいのひも」と聴かせて、それを言はせ、それから
「はこのひも」と聴かせて、言はせ、なほ
「かさのひも」
「まどのひも」

も、各々聴かせて、言はせます。この場合に應用した「ヤクワン」「チャワン」「カサ」「マド」は既に名稱語の練習に於て練習した言葉であり、「ハコ」「トケイ」「フタ」「ヒモ」は今この課程で練習した言葉でありますから、すべ

てお眠みの言葉ばかりで、單語としては意味の分らないのはありません。唯、「ノ」だけが未だ分つてゐないのであります。従つて學習者は「ノ」といふ言葉が何であるか、同時に名稱語と名稱語の間に置くのは、どんな意味があるのかについて、非常な關心をもつて練習を續けてゐます。

「ハコ」は「ハツコ」と、「フタ」は「フツタ」と促音になることがあります。これは「ハ」なり「フ」なりを發音する際に上口蓋へ舌先をやるためでありますから、力を入れないやうにして、穩かに發音させるのであります。この弊は上の音を、強く發音すると、とかく陥り易いのであります。それからまた、「トケイ」が「トキイ」と聞えたり、「ヒモ」が「シモ」になつたり致しますが、その「ケ」が「キ」になるのは、「ケ」の口形が、「ケ」が「エ」母音による音で、「エ」と同じ口形で發音するのでありますが、それが「エ」の口形とよく似た「イ」母音の口形による「キ」といふのと、發音状況を殆ど同じくする所から起るのであります。「ヒ」が「シ」になるのは江戸兒諸君にも覚えのあることでありませう。音はとかく同行又は同列の口形の似よつた音と間違ひやすいものであります。

それから、句を教授する場合の一つの注意は單語には單語の口調があるやうに、句には句としての口調がありません。これは段々と日本語を習得する上には關心を要することでありませう。口調の整はない談話は、たとひ音の誤らない言葉を列べても談話になりません。談話は言葉や音聲の臚列ではないのでございます。この句の口調を整へることの練習は、やがて談話口述の整調となるのであります。それで、この句の調子を正しくするには、この學習程度では助詞を上言葉に附けていふ言方を心得させます。「ハコ」「に」「ノ」、「ハコノ」と續け、そして、もとよ

り猶豫なく、「フタ」を續けます。でありますから、「ハコ・ノ・フタ」、或は「ハコ・ノフタ」のやうになつてはなりません。それが、學習者によると、「ハコ」が一語、「ノ」が一語、「フタ」が一語と分つてゐるものですから、一語、一語で並べるやうな感じでの言方を致しますから注意しなければなりません。さうして更に「ハコノフタ」はちやうど一名稱語として意識して、いふやうに導くのであります。今、名稱語の次に、この「ハコノフタ」と其他の「ノ」で繋ぐ句を出したのは、これまでに習得し來つた名稱語と言葉の上でも操作上の感じでも、あまり懸け離れない扱の出来るものとしたつもりであります。

そこで、「ノ」の理解を與へることでありますが、それにしても、その「ノ」が助詞だとか、その働はどうだの、かうだのと説明することは一切致しません。この教授に關係ある教具を學習者の前に出して、机の上に列べて置いた、その中から「箱」を取り上げて示し、「ハコ」と言ひ聽かせ、學習者にも言はせませう。「次に「土瓶」を取り上げて「どびん」と言ひ聽かせて、學習者にも言はせませう。それから、又次に「藥罐」を取つて「やくわん」と言ひ聽かせて、言はせませう。さうして、今度は一つ一つに、その蓋を取り上げて、「フタ」と一つ一つについて言ひ聽かせませう。それから更に、今度は「箱」とその「蓋」との互の關係を感じさせるやうに動作して、「ハコ・ノ・フタ」と關聯的に言ひ聽かせませう。「土瓶」と「蓋」も、「藥罐」と「蓋」も、同じく動作を示して「どびんのふた」「やくわんのふた」と言ひ聽かせませう。それで、大概、何れも「フタ」は「蓋」であるが「ハコノフタ」は「箱」で、「どびんのふた」は「土瓶」で、「やくわんのふた」は「藥罐」で各所屬限定して言つてゐることの理解がつき、「ノ」がその

所屬的限定を意味するためのものであるといふことを臆気ながらも解するやうになります。そこで、進んで、今度は「ちやわんのふた」と聴かせて、「茶碗」の「蓋」は茶碗に所屬限定されてゐる「フタ」であることを知らせ、なほ「トケイノヒモ」、「かさのひも」「まどのひも」も同じ方法で動作しながら聴かせ、且言はせませす。さうすると、おのづから理解を確にするやうになつてまゐります。かうした場合にも、唯理解にのみあせらず、圓熟した叙述、調子、言感に導くことを忘れずに、寧ろ理解は言葉活動の慣熟に伴つて現はれるのに省みて、無理をせず、漸々と明けて行く曉の光を認めて進むやうになすべきであります。

理解してから後の復習的練習、その他の扱は前からの名稱語を扱つたのと同じに致します。

今度は次の課程

第十二

コドモ
オトナ
クツ
ゲタ

コドモノ クツ
オトナノ ゲタ

初の第一課程からの全部の復習的練習を終つてから、この課程に入ることはいつもの通りでございます。この課程の新しい言葉は「コドモ」「オトナ」「クツ」「ゲタ」の四つであります。その教授もまたこれまでの通りに致します。そして、その四つの新しい言葉を使つて、前の課程で教授した「ノ」を挿んだ句を扱つた通りに練習するのであります。その扱はくたくたしくなりますから、改めて申しません。

發音は「コドモ」の「ド」の濁音にならなかつたり、「ダ」に聞えたり、また「オトナ」の「ナ」が「ノ」に響いたりすることがあります。また「クツ」は「クチュ」になりやすいやうに思はれます。これは「ツクエ」の「ツ」が「チユ」になるのと同じであります。

これは前の課程の「ノ」で繋ぐ句の練習の繼續とも見られる程度のもので、取扱上別に困難な課程ではありません。應用的練習に十分力を入れて練習致します。前の課程全部とこの課程を一所にして、幾回も模範句を言つて聞かせては言はせませす。さうして、口頭練習を十分に言ひ慣れるやうに導きます。よく見る所でありませす、かういふ場合に學習者が忘れてゐるとか、或は言ひ出せないでゐるとかすると、それを思ひ出させようとして、學習者が考へ出すのを待つてゐる教授者がありますが、圓滑な口述力を養ふ方面からすれば意を得ないことで、さうい

ふ時には考へさせる時間を置かないで、直にその言葉を思ひ出すやうに何か暗示を與へます。或は直にその言葉を言つて聞かせるなり致します。徒に考へさせて時間を空うするよりも、その間に一回でも言はせることに費すことを考慮する方が有効であるからでございます。さうですから、かうした句の練習にも、成るべく既習の名稱語を應用して、次のやうな句をも練習致します。

「こどものかさ」「こどものかばん」「こどものばしう」

「こどものてぶくろ」

「おとなのかさ」「おとなのかばん」

「おとなのぼうし」「おとなのげた」「おとなのくつ」

「くつのひも」

名稱語も皆既出の言葉であるし、句形もはや聴きなれ、また言ひなれて來てゐますから、教授者が模範を示せば、すらすらと言へます。その分つてゐる言葉なり句なりを、すらすらと言葉の意味や理解などの爲に勞しなくて輕快に言ふやうに導くのがこの練習の眼目であります。

次の課程は

第十三

ガス

デントウ

スキダウ

スキダウノミツ

であります。この教授も前々通りにして練習して行きますが、「スキダウノミツ」は「スキダウ」は既に練習したし、「ミツ」を別に名稱語として練習してからでなくとも、直に一つ續きに言ひ聴かせて、そのまま言はせても差障なく取扱へると思ひます。若し、學習者が、なほ口述に困難するやうであれば、これまでのやうに一應、一つ一つの言葉で練習してから、續けて言ふ式で練習する外ありませんが、成るべく全句をそのまま言はせるやうに致したいと思ひます。それは句を一意識の下に言へるやうに慣れさせるためには、言葉を別々の觀念から離脱させて、一句一觀念にならせるやうにしなければならぬからであります。この課程の教材もそのつもりで編んだものであります。

發音では、「デントウ」、「スキダウ」の引く音が落ちたり、「デントウ」の「ト」が「ド」になつて「デンドー」といふかと思ふと、今度は「スキダウ」の、「ド」が「ト」になつて「スイトー」といふことがあります。清音と濁音のことは、前にも申しましたが、誠に注意を要します。「ダウ」が「トウ」に間違ふと、「水道ノ水」が「水筒ノ水」になる程の違ひが生じます。

理解は「ガス」「デントウ」「スキダウ」は臺所の模寫でもあれば結構です。都會ならば、どこの家にもあらうはずの勝手元の實際設備を見せるのは手取早い方法であります。「ミヅ」は水道の蛇口から流れ出てゐる所の繪を見せると、「水」を分らせると共に、水道そのものの理解ともなります。若し勝手元で水道の水を出して見せられれば、一も二もないことでもあります。

復習的練習は次のやうな句を應用的練習と相待つて行ひます。

「ちやわんの みづ」 「どびんの みづ」
 「やくわんの みづ」
 「へやの しろぐち」 「へやの まど」 「まんの と」
 「まどの しろぐち」 「しろぐちの と」
 「しろぐちの しろぐち」 など

次の課程は

第十四

デンシヤ

キシヤ

ジドウシヤ

ヒカウキノ オト

この課程の取扱も前回の通りであります。この教材の排列、組織は、この前の課程と同曲であつて、前のは家中の趣でありましたが、これは家の外の事柄で、乗物とその資料であります。これは、或時、市外に散策を試みようと家を出て、或郊外の停車場に下車した際に、貨物列車が長蛇の如く延々として眼前を疾走して過ぎました。そして驛を出て自動車を呼んでゐると、眞上の空に轟音を轟かせて飛行機が飛行するのを見ました。この時の事實がそのまま、この教授資料になりました。

發音は、「デンシヤ」「キシヤ」「ジドウシヤ」の「シヤ」が「シヤ―」と音を引いたり、また拗音である「シヤ」が「サ」になることのないやうに、「ジドウシヤ」、「ヒカウキ」の二音節に引く音の引く部分が脱落して、「ジドウシヤ」「ヒコキ」にならないやうに、それから、「キシヤ」「ヒカウキ」の「キ」が「エ」の母音にならないやうに、それぞれ注意を要します。それから、「オト」ですが、「オット」と促音の生ずることが間々あります。甚しきは、それをまた引つばつて「オット―」となることもあります。所がそれらが教授者の耳に觸れても咎めもせず、一向に感じがないのかと思はれるやうな教授振を見ることが屢あります。注意が望ましいことでもあります。發音の誤は誠に聴

き分け難いものがあります。それが判然と聴き分けられるやうならば、それは、音の誤といふよりも、明に言葉の間違になります。發音の誤るのは誠に微細な個所であつて、これと突止めることも出来ない程のものがあります。けれども、それが正しくないと感得する耳が教授者になくはなりません。學習者の發音の正確を缺くは或點まで教授者の耳の敏捷でないためといふことを否み難いのであります。

電車や汽車や自動車、飛行機の理解は、一々標本や繪畫を持ち出さなくても、大抵は最早知つてゐると思ひますが、しかし、各種の乗物を集めた繪本で十分ですから、見れば色々の點で理解を助けます。さういふ場合には、當面の物々のみでなく、馬車でも人力車でも荷車でも各種の車を描寫したもので、色々見せて、その名稱などを耳に入れて置くのは無益ではありません。それから、「オート」は實際に、例へば、靴の音をさせて「靴の音」といふ風に入手近くに見るものによつて音を立てて聴かせて、「音」を會得させるやうに致します。

應用練習としては、次のやうな句を練習致します。

「でんしゃのおと」 「きしゃのおと」 「じどうしゃのおと」

「げたのおと」 「くつのおと」

それから、應用を押し擴めて、

「でんしゃのみち」 「きしゃのみち」 「でんしゃのいりぐち」

「でんしゃのまど」 「きしゃのいりぐち」 「きしゃのまど」

「じどうしゃのおと」 「じどうしゃのまど」
などに及ぼします。

次の課程は、

第十五

イト

ハリ

ハサミ

モノサシ

ハサミ ト モノサシ

であります。これも前來の方法で扱ひます。名稱語の理解はすべて直觀によるを原則とするので、裁縫具一式を用意致して置くと便利であります。この課程には句の構成の要素の一つの助詞「ト」を始めて出しました。名稱語から句に入つた時に「ノ」といふ助詞でつなぐ句を練習しました。それは、二つの名稱語を「ノ」で繋いで、句を構成したといふものの、或點までは名稱語とも考へられる程度のものであります。「ハコノフタ」といつても、「ハコ」

と「フタ」との二つとは考へないで、「ハコノフタ」といふ一つの物の名稱として認識したのであります。これは名稱をあらはす單語から句に入る時の言葉の伸びる順序に従つたのであります。ところが、今度の「ト」は、それとは違つて、別々に二つの名稱、即ち物を列べて、これを同時に見た意識の下に、二個並存の状態を言ひ現はす言ひ方を教へるものであります。この「ト」を理解させるには、例の通りにこの課程の各の言葉を一つ一つ練習して、終は「ハサミトモノサシ」の練習をすませた時に、教具の中の「鉄」、「物尺」を取つて、前に列べて置きます。そして、さきに「鉄」を指して「ハサミ」、やや音を高くして「ト」と続け、次に指先を「物尺」に移して「モノサシ」。かういふ風に動作しながら、それを數回反復致します。「ハサミ」と「モノサシ」は別々の名稱であることは、改めて注意するに及びませんが、それによつて、この二つの物を列べて、それを一つに見て、一觀念的に括めて表現するのは「ト」の働であると感じるのであります。そして、なほ既習の各種の教具を並列して、

「S」とはリ」「S」とつくゑ」

「OO」と〇〇」「△△と△△」「□□と□□」

といふ風に、いくつかの物を取り變へて、一觀念の下にその二物を「ト」で繋いで言ひ方を示し、なほ反復します。且言はせませす。すると、自ら會得してまゐります。

この課程に於ての發音上の注意は、「イト」を「イット」、「イッド」、または「イド」といふことがあります。それから、「ハサミ」「モノサシ」の「サ」でありますが、前に「キシヤ」「デンシヤ」の「シヤ」が「サ」のやうに

聞えないやうにと申しましたが、ここでは、それと反對に、その「サ」が「シヤ」に響くことがあります。また前に「ト」が濁音に響くと申しましたが、この場合にも同じことがあります。或學習者のことであります。が、「ハサミドモノサシ」といふのであります。幾回も「ト」と繰り返して聞かしても、どうも正しく言へない。しかし、教授者の模範音を聞き誤つてゐることも見えないし、自身でも濁つて發音すると思つてないことも明であります。そして、外の言葉から引きはなして「ト」だけ單音で言はせて見ると、正しく清音で言へます。だのに句に狭むと駄目になります。暫くそのまゝで置きました。が、假名を教へるやうになつて、或時、書取を致しまして、「ナシトリンゴ」と書かせましたのに、やはり「ト」を「ド」と濁つて書いたのには驚きました。それでも、始終機會を捉えては正確に模範音を聴かせ、油断のない練習を続けましたが、程經て、終にその誤つた發音が自然的に直りました。正確な發音は必竟模範音の反射であります。

この「ト」を教へますと、あらゆる事物の並列状態を表現することが出来ますから、日本語運用の限界は、單語、單語的の句を練習することに比べれば、ずつと廣くなります。應用練習としては、既習の名稱語、句は残らず應用することに致します。即ち、

「はたとはな」「はなとはた」「やまとみち」

「みちとはし」「S」とつくゑ」「つくゑとS」と

以下、この式で既習の名稱語悉皆の總復習を兼ねて、「ト」で繋ぐ句の練習。また助詞「ノ」で繋いだ句を他の言葉

ヤ何と、この「ト」で繋ぐ言方も練習致します。それは、

「どびんのふたとやくわんのふた」

「はこのふたととけいのひも」

「しりぐちのととまどのしやうじ」

「こどものくつとかさ」

「おとなのぼうしとかばん」

以下、この類で、既習語を應用して、段々に日本語運用の限界が廣まつて行くやうに致します。この際に提出する句は、あまり長いものは避けることであります。この「ト」で繋げば、幾つでも名稱語を列べて言ふことが出来ますけれども、今の程度では單語と單語を、短句と短句を、いづれも一回連繋する位で、長い文句をぎち／＼言はせるよりも、短文句の口述練習を周密にすることでありまして。概してこの學習程度での句の練習は十五音節内外の連繋を適當とするやうに思ひます。

次は、

第十六

イヌ

ネコ

イヌトネコ

シロイイヌ

クロイネコ

動物の名稱語は始めてであります。「ネコ」の「コ」は「ト」になつて「ネト」と發音することがあります。「シロイ」、「クロイ」の「ロ」は完全に表現が出来なくて「ル」に響くことがあります。そして、この形容の言葉の語尾が「イ」活用になる場合には、その「イ」をはつきりと言ひ現はすやうに、他語と連絡する場合には殊にそれを注意しなければなりません。その「イ」は脱落しやすいからであります。そしてこの形容語を名稱語に冠する場合には、兩者一連的に言はせませす。「シロイ」と「イヌ」を二個の言葉として區別立てては扱ひませせん。即ち「クロイネコ」ならば「クロイ・ネコ」ではなく、殊に「クロイ」の「イ」と「ネコ」の「ネ」の續き合ふ所には、言葉意識に拘はらないで「イネコ」として練習してから「クロ」を加へて「クロイネコ」と言はせると、言ひ方を正しくする手蔓になることもあります。

この課程の扱は復習その他とも例の通りで進めます。「イヌトネコ」は前出の「ト」で繋ぐ句の應用的練習であります。また、ここに新しく出た形式は「シロイイヌ」「クロイネコ」であります。この扱は「シロイイヌ」を

數回反復して、よく聽かせた上で言はせませす。「クロイネコ」も同様に致します。この二つの句を交互に練習口誦も致します。

この課程の理解には、繪畫、標本などで、直觀式に致すのでありますが、「シロイ」「クロイ」を了解させるといふことになりますと、直觀させるといつても、多少の手續を加へる必要があります。もとより、色を了解させるには、口で言つたり言葉で説明したりするのでは不可能であります。どうしても目に訴へる外ありませんが、それも、唯、例へば、白色の紙を見せて「シロイ」といふ程度では徹底致しかねます。それには二つ以上の色を對照比較して認識に導きます。今この教材を扱ふのでも、「白い犬」の繪を見せて、「シロイイヌ」といつても、「イヌ」は「犬」と直に了解しますが、「シロイ」は何かといふことになりませうと思はれます。嘗て、同じ經驗を致したことがあります。「シロイ」の理解のために、何も書いてない紙を示して「シロイ」といひましたが、了解しません。なほ教具中の裁縫用具から白い糸を取り出して「シロイイト」と聽かせましたが、それでも「イト」は既習語でありましたから問題はないでしたが、「シロイ」には首を傾けておりました。「シロイカミ」「シロイイト」と二三回繰り返して見ても納得が行かないらしいでした。そこで、もう一つ糸の黒いのを追加して、それと前の白いのとを對照して、白い方の糸を示して、「シロイイト」、黒い方の糸を指して「クロイイト」と聽かせました。それで「シロイ」「クロイ」は色のことと分つて、「シロイイヌ」も「クロイネコ」も理解し、そして直に自分の側にある黒色の箱を見て「クロイハコ」、自分の靴を指して、「クロイクツ」、又自分のワイシャツを摘んで「シロイキモノ」な

ど自分で應用しましたのは、言葉運用の自力發展で愉快な進歩だと感じたことがありました。その時から、このやうな場合の教具、掛圖などには、對照比較に便利なものを作るのが有效であると思ひました、今もその意味で作つたものを使用して居ります。

應用練習には、既習語で「シロイ」「クロイ」を冠して使用し得るものに、「シロイ」ならば、

「しろいぬ」「しろいと」「しろいかみ」

「しろいくつ」「しろいはな」「しろいおと」「しろい」

のやうに、また「クロイ」ならば、

「くろいねこ」「くろいはこ」「くろいと」

「くろいばうし」「くろいおと」「くろい」

のやうに残らず應用致します。また、「シロイ」「クロイ」を色々順序を混交的に變へても適當に練習致します。

第十七

タカイ イヘ

セマイ ミチ

ナガイ カハ

タカイ ヤマノミチ
セマイ ハシ ト ナガイカハ

この課程は「ミチ」「ヤマ」「ハシ」の三語が既出語で外は新出語であります。また、句の形式は「ノ」で繋ぐのと「ト」で繋ぐもので、どちらも既出のものであります。發音上にも特に注意を要する程のものないやうであります。新出語の「イヘ」「カハ」文字で現はすと、發音通りでないやうであります。音による教授には、假名遣は何の関係もありません。「イヘ」は「イエ」、「カハ」は「カワ」と發音すればよろしいのであります。「イヘ」は自分達の家屋内におて、これであると説明して簡単に分らせようとしても、ちよつと分らせにくいものであります。机の前にかけてゐながら手を動かして、これだと示せば「イヘ」は部屋のことと思ひ誤ります。指さしながら上の方に手を運んで見せたら「天井」だと誤られた例もあります。全面的に示さうとしても局部的に理解しがちなのは人間の習性であります。故に「イヘ」は、實物よりも、繪畫によつて理解させるが一番であります。「カハ」も同じと思ひますが、橋を對照とすれば、随分下手な素人畫でも理解します。それから、「タカイ」「セマイ」「ナガイ」の三つの形容語がありますが、これらは「タカイ」に對しては「ヒクイ」、「セマイ」に對しては「ヒロイ」、「ナガイ」に對しては「ミジカイ」を對比して了解させます。それは前の「シロイ」に對して「クロイ」を對比したのと同じ筆法であります。或は對比するといつても、「ヒクイ」「ヒロイ」「ミジカイ」はまだ習得しないではないかと言ふものが

ありませう。それは無理のない批難であります。しかし、日本語での言葉は未知であるけれども、その事柄はよく知つてゐるのでありますから、「ナガイ」といふ言葉を練習してから長いものを示して、それに短いものを對比し、さうして「ナガイ」といふ言葉を長い方のものに當てはめれば了解するのであります。「セマイ」も「タカイ」も同じことでもあります。その場合に「ナガイ」と「タカイ」とは上への長さ、横への長さ、「セマイ」は幅の短さの見方と感じの違いに過ぎませんから、それらを誤りなく會得させるやうに注意致します。また、かういふ場合に「タカイ」の對語としての「ヒクイ」、「ナガイ」に對しての「ミジカイ」、「セマイ」に對しての「ヒロイ」は、教授語としては提出しなくとも、學習者の耳に入れることは無益ではありません。教授者によると、教科書萬能で教科書によつて教へた既習の言葉以外の言葉を使用させることを忌むやうな傾がありますが、寧ろ既習以外の言葉も適度に聽かせる機會がある方が、たとひ、それを一々正式に教授、又習得するのではなくとも、語彙増加、聽取訓練などのためになるものであります。

この課程の應用練習は、この新出語を土臺に、既習の言葉で應用し得られるだけのものを使つて、應用句例を作成して練習することは例の通りに致します。これを濟ませてから、既習語句の總復習を致します。これは第一課程の「ハタ」「ハナ」から始めて、この課程の終までの應用練習したものまでも含めて復習的練習を致します。

これで、名稱語と簡単な句を扱ふ極初期の教授は終ります。そして、次の課程からは構成した文に入ります。即ち「話すこと」の初歩の教授に進むのであります。

ここに、重ねて一言したいと思ひますが、日本語教授に於ける、これらの極初期の習練は、日本語の叙述運用の基礎を作るもので、實に大切で忽にすることの出来ない作業であります。これを輕視する不十分な練習が禍して、發音上にも叙述運用の上にも不結果を招來したものは、いくらあるか知れません。然るに、それに氣附かないでゐる教授者も學習者も少なくないことは眞に遺憾千萬なことでもあります。もとより、單語及び句の學習は僅にこれ終りを告げたわけではありません。これは極初期の段階に於て、今後の日本語の表現構成の段階に進む準備的の極少部分を練習して訓練の緒についたに過ぎないのであります。今後の訓練が益綿密に周到に確實に行はるべきことは言を待たないのであります。しかし、その首途が如何に確實に踏み占められなければならないかは、日本語修得の將來を卜するものである所以を痛言したのであります。

最初時の教授時間は、毎日一時限五十分に致します。さうして、一週乃至二週後から、毎日二時限として、それを専ら練習、復習のためにすることが出来れば好適であると思ひます。

以上、極初期十時限前後の段階に於て收得した言葉の数は

名稱語 六十二、形容語 五、助詞 二、であります。

日本語教授法文獻目録 (一)

『外國語 我が國語教授法』

山口喜一郎著

昭和八年 著者發行、菊判五〇七 價四、〇〇

章一―言葉に就て、章二―言葉の意味と事物の意味、章三―言語活動、章四―實際生活による言葉の習得と學習による言葉の習得、章五―外國語教授の困難、章六―外國語教授の根本についての對蹠的見解、章七―對譯法と直接法、章八―言葉の學習に伴ふ言葉の生活、章九―外國語教授の分科と其の關係、章十―外國語教授の教授材料、章十一―言葉の解釋法、章十二―言葉の練習法、章十三―聽方教授、章十四―話方教授と綴方教授、章十五―讀方教授、章十六―結語

『日本語教授法』

松宮 彌平著

昭和十一年日語文化協會發行四六判三二二 價二、〇

〇―緒言、二―日本語教授の現状、三―日本語教授上の缺點、四―如何に教ふべきか、五―初期の日本語教授、六―日本語の理解、七―讀方と書方、八―讀方教授、九―讀方教科書、十―書方教授、十一―會話教授、十二―會話と語法、十三―會話と形式、十四―會話と敬語、十五―その他の注意、十六―發音教授の注意、十七―復習練習及訂正

『科學的日本語教授法』 堀 敏夫著
(滿鐵教育研究所發行研究要報第九輯抜刷)
昭和十一年 滿鐵教育研究所發行 菊判二六 非賣品
一―日本語教授の科學的建設、二―滿鐵を中心とする日本語教授の新傾向、三―滿支に要求さるべき日本語について、四―語彙―基礎日本語、五―アクセント、六―發音、七―結語

『效果的 日本語教授法の要領』 大出 正篤著
速成式

並に「效果的速成式 標準日本語讀本」の編纂趣旨

昭和十三年滿洲圖書文具株式會社發行

四六判 二五 非賣品

第一、日本語の普及と其の教授法、一、日本語普及の現
狀、二、日本語教授の目的、三、日本語教授法の種類、第二、
效果的速成式日本語教授法の要領、一、會話の力を先づ
與へる事が必要、二、效果的話方教授の目標、三、效果
的話方教授取扱の實際、四、效果的教授に要する條件、
第三、「標準日本語讀本卷一」の特色、一、到達程度を明
示し、教授時間数を限定す、二、教授法と結びつけ、問
答教授の徹底を計るに便す、三、發表形式を易くして、
文型の數を多くす、四、語彙は日常用語本位約一千語

『中國人に對する日本語教授法』 渡邊 正文著

昭和十四年、三通書局發行、四六判九一、價、七〇

第一章—緒論、第二章—教授法の發展過程、第三章—對
譯式と直接教授法、第一節—對譯式、第二節—直接教授
法、第四章—日本語教授の要旨、第五章—日本語教授の
方針、第六章—日本語教授の方法、第一節—發音教授、
第二節—新語句の解釋法、第三節—話方教授、第四節—
讀方教授、第五節—書取及作文教授、第六節—其の他の
注意事項、第七章—各期に於ける教授要點。

『支那人に對する日本語の教へ方』 阿部 正直著

補述支那語國民に對する日本語教授の要訣

魚返善雄補述

昭和十四年東亞同文會發行四六判五八二、價二、五〇序
文、序に代へて、一—動詞その一、二—人稱代名詞、三—
名詞、四—文章の構造、五—指示詞、六—動詞その二、

七—形容詞、八—副詞その一、九—副詞その二、時—副
詞その三、場處、十一—です。その他、十二—文章の構
造その二、十三—疑問詞、十四—後置詞、十五—文章の
構造その三、十六—動詞の短い形式、十七—接續詞、十
八—動詞の特殊用法、十九—規則動詞と不規則動詞、二
十—助動詞、廿一—受動形、廿二—比較文、廿三—主格

「は」と「が」、廿四—命令形の前半、廿五—神經痛的
「は」、廿六—數詞、廿七—感嘆詞、廿八—敬語、廿九—
雜、卅—發音と文字、附録—支那語國民に對する日本語
教授の要訣。

『日本語教授法概説』 山口喜一郎著

昭和十六年新民印書館發行菊判一六四 價二、五〇
第一章—外國語、第二章—外國語教授の困難、第三章—
外國語教授上の問題、第四章—外國語の教材、(一)語音
と語彙、第五章—外國語の教材(二)語法と用例、第六
章—外國語の教材(三)會話と講讀、第七章—外國語の

教材(四)獨話と對話、第八章—外國語の教材(五)話
言葉と讀言葉、第九章—外國語の教材(六)教材の全一
性第十章—外國語の教習(一)語音と語義、第十一章—
外國語の教習(二)立體的教習、第十二章—三種三様の
教習、教授例と結語。

『最新日本語教授法精義』 工藤哲四郎著

昭和十七年 帝教書房發行 四六判二二九 價二、〇
〇第一章—興亞と日本語 一、東亞新秩序と日本語 二、
日華兩語の親和性 三、日本語の品位 四、日本語教師
の使命 第二章—言語と教育 一、事實と概念 二、音
聲と言語 三、言語と文字 四、言語と精神 五、言語
と教育 六、興味と自覺、第三章—日本語の特質と國民
性 一、語彙から見た特質 二、文法上から見た特質
三、文字上から見た特質 四、音韻上から見た特質 五、
言語學上から見た特質 六、總括的立場に於て 第四章

一、母國語と外國語教授の相違點 一、言語環境の相違
 二、教授以前に於ける言語習得の有無 三、言語の表現形態の相違 四、心理學的意識上の相違點 五、教授目的上の相違點 第五章—外國語理解の段階 一、概念的
 理解より具體的理解へ 二、知的理解より全心的理解へ
 三、部分と全體 四、目と耳・口、第六章—教授方法論
 一、方法と情熱 二、學習方法と教授方法 三、對譯法と直接法 四、綜合的取扱と分科的取扱 五、國字と漢字、第七章—理解の段階から見た指導要領、第一節 知的理解の指導、第二節 具體的理解の指導、第八章—教授案五題。

五十音 三、鼻音 四、長音と短音の混同 五、清音と濁音の錯誤 六、促音 七、拗音 八、轉呼音 九、音便 十、近似音の混同 十一、母音の無聲化と有聲化の誤 十二、附言 十三、アクセントに就いて、第三章—文章の教授 一、まへがき 二、文法に對する心構 三、文法上の用語 四、假名遣 五、送假名 六、名詞 七、代名詞 八、數詞 九、動詞 十、形容詞 十一、助動詞 十二、助詞 十三、副詞 十四、接續詞 十五、感嘆詞 十六、文法的知識の應用、第四章—餘論、一、文字と音聲 二、音訓に就いて 三、文字に關して 四、句讀法 五、聽取、書取、作文 六、擬聲語

『支那語國民に對する日本語の教育』

野村 瑞峯著

昭和十七年 財團法人 啓明會發行

菊判一六八 價一、五〇

第一章—序、第二章—發音の指導、一、まへがき 二、



財團法人 日語文化協會事業概要

財團法人日語文化協會は大正二年故阪谷芳郎子爵によつて創設された日本最古の日本語教授機關で爾來三十年間在留外國人に對する日本語教授並に日本語海外進出のために努力して來た。特に最近に於ては大東亞共榮圈確立の國策に順應し、左記部門によつて事業を行つてゐる。

- 一、日本語教授研究所—教授法・教材・教具・參考書等の研究編纂、日本語教師養成等の事業
- 二、出版事業部—日本語教授に關する研究資料、教科書、參考書、パンフレット等の刊行
- 三、日語文化學校—在留外國人に對する日本語教授
- 四、日本語海外普及事業部—在外日本語教育機關との連絡

役員

理事及監事

第一銀行頭取	明石照次男
貴族院議員	出淵勝次
男爵	團伊能
文部省圖書局長	松尾長造
(常務)	松宮彌平
東京帝大教授	高柳賢三
貴族院議員	米山梅吉
貴族院議員	有吉忠一
北支開發株式會社總裁	津島壽一
主事	松宮一也
日本語教授研究所	松宮彌平
所長	松宮彌平
研究主任	石黒魯平
研究員	中丸平一郎
	檜田文之
	山本彰子

「日本語教授の出発點」
(一冊金六十錢)

昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行

不許複製

著者 松宮彌平

發行人 財團法人 日語文化協會

代表 松宮一也

東京市芝區芝公園九號ノ三

東京市中野區本町通一ノ一

印刷人 水野昇

印刷所 水野印刷所

發行所 東京市芝區芝公園九號ノ三
財團法人 日語文化協會
振替東京五八七五八番
電話芝(43)三八六六番

933
409

製本控

933 函 409 號

日本語教授の出版費

備考

日 月 年 日

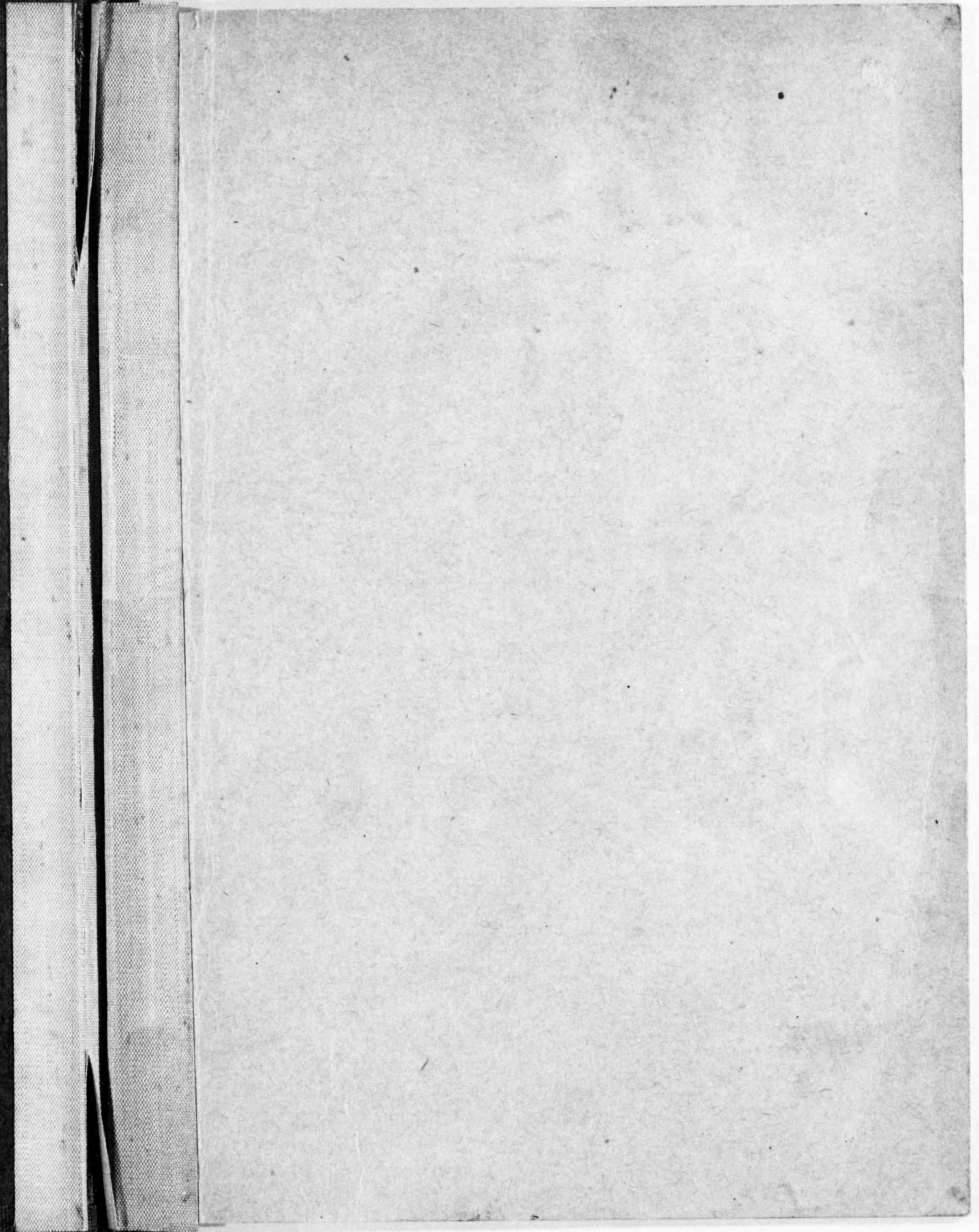
財団法人 日語文化協會刊行物

日本語の世界的進出	ラヂオ放送による日本語の普及	日本語普及の新段階	英日日本語會話語法	英日日本語會話 (卷一、二、三)	日本語讀本 (卷一・二)	日本語教授指針 (入門期の教授法)	日本語教授法
松宮一也著	日本語教授研究所編	松宮一也著	松宮彌平著	松宮彌平著	松宮彌平著	日本語教授研究所編	松宮彌平著
大東亞共榮圈に對する日本語普及並に教師養成、教授法、教材等關する實際經驗を述べ	ラヂオ放送の特性に基き日本語普及の方法を詳説す	日本語の海外普及に關する諸工作を具體的に述べ	著者永年の教授經驗をもとにして、日本語會話語法の概略を述べたもの	日本文、ローマ字及び英譯並に語法の説明から成り、獨學用として最適書	日本語初歩學習用讀方教科書	日本語教授に於ける初歩の指導法を實地教授に基いて詳細に説明す	著者五十年の實際經驗による教授法を概説す
四六判 三六〇頁 定價 二・五〇圓 婦女界社發行	菊判 九十頁 定價 六・十錢 郵稅 四錢	菊判 五十頁 定價 四・十錢 郵稅 四錢	菊判 二〇〇頁 定價 三・〇〇圓 郵稅 十二錢	菊判各三〇〇頁 定價各一・〇〇圓 郵稅 八錢	四六判各一〇〇頁 定價各一・〇〇圓 郵稅 八錢	四六判 二〇〇頁 定價 二・〇〇圓 郵稅 十二錢	四六判 三一七頁 定價 三・〇〇圓 郵稅 十二錢

東京市芝區芝公園九號地三

電話芝④三八六六番

933
409



終

